

昭和の南海地震体験談

氏名:栗原 千鶴子(くりはら ちづこ)
生年月日:昭和11年4月22日
地震を体験した場所:広川町・自宅1階廊下
当時の家族状況:父、母



1) 地震発生時の状況

当時小学校4年生で、ちょうど目を覚まし、お手洗いの為に自宅1階にいた時、強い揺れを感じた。慌てて2階に上がり服を着替えた。その間もユツサユツサという感じで大きく揺れ、天井から吊るした電球がユラユラ動いていた。長い間揺れた。

2) 津波襲来時の状況

揺れが収まった後、近くの空地で近所の人達と焚き火をしながら集まっていた。男の人達が海の様子を見に行ってくれ、約20分程で戻って来た。「もう、海静かやで」と言う言葉に帰りかけた頃、「津波やぞお!」と大声で叫んで知らせてくれる人がいた。そのままお宮さん(広八幡神社)にみんな一緒に避難した。いつもの道を行きかけた時、橋の上の真っ暗闇の中に、真っ白な波しぶきが見え、あぜ道に引き返した。人が集中した為、あぜ道を通れず、田んぼの中を歩いた時、霜が降りていたのでサクサクと音がした。真っ暗な中、声と背を頼りに進んだ。中には用水路に落ちた人もいて、持っていた物を落としたり、捨てて身一つで避難した人もいた。やっとの思いで着いたが、ホッとするより異様な気配に震えが止まらなかった。近くの農機具小屋でうずくまり、津波が収まるのを待った。海の方ではポオーツとした光とゴオーツという音も時折聞こえ、余震が怖かった。

3) 家族の行動・被害

地震の後、母はあんかコタツの豆炭を気にして、2階の窓から「みんな、火、気をつけてよう!」と叫び、近所に注意を促していた。家族で避難でき、無事だった。夜が明け、明るくなってから自宅に戻った。ヒザ下程度の浸水だったが、田んぼに泥が溜まり、作物が全てダメになった。

4) 集落・周囲の被害

近所は同じ床下浸水の被害。田んぼは地面が低く、津波の勢いも激しかったようで家財道具などが押し寄せられていた。隣に住んでいた小学校2年生の女の子は、一度避難したが、物を取りに戻った母親についてきて、水に足を取られて田んぼまで流されて亡くなった。近所のおばあさんも水に足を取られ亡くなった。川沿いでは津波が川を上って、近くに建っていた

日東紡社宅の家屋が、中に居た住人もろとも流された。社宅は和歌山県以外の人が多く、津波を知らなかった為、避難せず流され、多数が亡くなったと聞いた。堤防のあった町の中は驚くばかりに静かだった。夜が明けてから、乳母車を押して避難できたり、逃げられなかったお年寄りも自宅の2階に居た。津波が来る前に堤防の赤門を閉めてくれた人がいた。長く動かさずにいたので、完全に閉まりきらなかったが、船の燃料を入れて



いたドラム缶を使って隙間をふさいで、海水が町に入らないようにしたおかげと言われている。

5) 地震・津波後の生活

ちょうど冬休みの時期だったので母の実家に預けられた。子供だったのでよく分からない。小学校に被害は無く、3学期より再開した。

6) 次の災害への備え

地震の際はまず避難路を作る為、近くの窓や扉を開けるようにしている。揺れが収まったら避難する。持ち出しリュックを作っているが、食料や水は入れていない。それと寝室には履物と防寒着を置いている。卓上コンロも自宅にはあるが、怪我をしたり、はまり込んだり、慌てるので、あまり欲張らないようにしている。避難訓練に実際の避難スタイルで参加している。